



2019 年 (令和元年)
6月号 (No. 889)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

皇太子時代の天皇陛下の登山2題 北八ツ・天狗岳と南ア・甲斐駒ヶ岳

令和元年、新天皇陛下がご即位されたが、陛下の山好きはつとに知られているところで、本会員であるとともに、恒例の年次晩餐会にもしばしばご臨席されている。このたびのご即位にあたり、皇太子時代の殿下の2つの山行、天狗岳と甲斐駒ヶ岳における出会いを、本会員ふたりに綴ってもらった。

20年ぶりに実現した殿下の天狗岳登山

米川正利

2019年5月1日、新しい元号、令和元年となり、新天皇陛下がご即位された。陛下は幼少のころより全国の山々を登られ、八ヶ岳も何山か登られている。権現岳、赤岳、横岳、硫黄岳などである。

2017年9月20日と21日の2日間で、天狗岳(2646m)に登られた。天狗岳は八ヶ岳連峰のほ

ぼ中央に位置し、東天狗岳と西天狗岳が双耳峰を成している。

天狗岳登山については、殿下から今までに何度か登山ガイドの私と黒百合ヒュッテに宿泊の予約があつたが、天気が悪かったり、急な公務があつたりして中止になり、

今回、20年ぶりに実現した。

最初の予約は1993年、雅子

目次

皇太子時代の天皇陛下の登山2題	
北八ツ・天狗岳と南ア・甲斐駒ヶ岳	1
20年ぶりに実現した殿下の天狗岳登山	1
皇太子時代の甲斐駒ヶ岳登山	2
第35回全国支部懇談会を奥日光で開催	4
東海支部登山学校、第Ⅲ期開校へ	6
さんけん通信	7
子どもたちが多摩川河口から雲取山に挑戦	8
信仰の道「浅間山古道」が復活	10
追悼 中世古直子さんを偲ぶ	11
活動報告／山行委員会	13
新入会員	14
図書受入報告	14
図書紹介	15
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

妃殿下と結婚されたところで、初冬の山を、新雪を踏んで歩く企画だった。その後も紆余曲折があつたが、2013年12月、日本山岳会の年次晩餐会に殿下がご臨席されたり、そのお帰りのとき会場場で私を見付けられ、「今度こそ天狗岳に登りに行きます」とお声掛けくださった。

9月20日は風が強かったが天気も良く、奥蓼科・洪御殿湯で殿下をお出迎えした。お会いするまでは私も大変緊張していたが、お会いして殿下から「何度か予約をしながら実現しなくてすみません。今回はよろしく」と笑顔で話し掛けられ、一気に緊張が解けた。いよいよ登山が始まると、北八ヶ岳の森林の形態——モミやオオシラビソ、シラビソ、コマツガ、ト

ウヒなど針葉樹の林相や森の苔類の説明をしながら歩く。キノコもたくさん出ていたので、美味しいキノコや毒キノコの見分け方をお話する。殿下は八ヶ岳の山の歴史についても下調べをされて来たよう

で、細かな話をされていた。殿下はときどき足を止めて写真を撮られていた。途中で登山者とすれ違つると、「どこからですか」とか、「八ヶ岳の登山はいかがですか」などと気さくに話し掛けられる。話し掛けられた登山者が、殿下と知って戸惑っていた。

2回ほど休憩を取り、登山口から2時間ほどで小屋に到着した。いつも御所内でマラソンをされているとかで、その健脚ぶりには驚かされた。休憩後、小屋周辺を散策する。中山峠展望台まで行き、明



筆者(右)の案内で西天狗岳に向かう殿下(2017年9月22日付、信濃毎日新聞より)

殿下が大好きな信州の蜂の子、小鮎の甘露煮など私の手作りのつまみで飲み始める。

今までに登られた殿下の山の話になり、私も登ったことのある近畿地方の歴史の古い山、大峰山が話題になる。特に山上ヶ岳から八経ヶ岳への縦走の話で盛り上がる。また、山小屋の屎尿処理問題の話なども出て、殿下がお得意な山の水の問題についても、いろいろな話をお聞きできた。

その後、小屋の従業員や長野県警察山岳遭難救助隊の面々も加わって宴会になったが、

明日の登山を考えて、早めに切り上げた。

翌朝、5時に殿下とふたりで朝食をとり、準備体操を済ませ、記念写真を撮って天狗岳へ。

天気は快晴無風で、絶好の登山日和になった。北や南アルプス、御嶽山、乗鞍岳と360度全山を眺望することができた。山の斜面は、

ナナカマトやダケカンバが赤や黄色に色つき始め、山の花もアキノキリンソウやトウヤクリンドウ、ウメバチソウなどが咲きそろっていた。

東天狗岳頂上までは1時間ほどで到着した。記念写真を撮り、四囲の山の説明をする。殿下は、今までに登られた山を懐かしそうに確認されていた。眼の前にそびえる甲斐駒ヶ岳の長大な黒戸尾根と南アルプスの連山、加賀の白山、甲武信ヶ岳、両神山など、登られた山が遠くまで見ることができた。最後に「北八ヶ岳の双子山は見えますか」と尋ねられるので、こちらの方向をお知らせすると、「愛子が林間学校で登った山です」と微笑んでおられた。

東天狗岳から西天狗岳へ向かう。

皇太子時代の甲斐駒ヶ岳登山

新天皇陛下は皇太子時代の1990(平成2)年7月18日から19日、

南アルプスの甲斐駒ヶ岳を訪ねられた。筆者は当時、明治大学4年生。就職活動の合間を見ながらアルバイトをしていた黒戸尾根の七丈小屋で殿下をお迎えした。ご即位の日、手元に残る記念写真と恩

山頂では大勢の記者たちが待ち構えていた。記者たちの撮影や質問も終わり、再び東天狗岳経由で中山峠から山小屋へ。途中で殿下とは、世界の水の話や、山登りをして大自然と触れ合う大切さ、地球温暖化で高山植物が退化していることなどを話しながら歩く。

小屋で休憩後、洪御殿湯へ。殿下とお別れのとき、「また来てください。今度、冬山はいかがですか」とお尋ねすると、「これからは無理でしょうね」とお答えがあった。実際にご案内してみても、大自然を愛する天皇陛下が、いつまでも私たち国民の身近な人であってほしいと切に思った。

(信濃支部会員、八ヶ岳山岳ガイド協会名誉会長)

尾野益大

賜の煙草を眺め、29年前を懐かしんだ。

殿下は梅雨明け宣言が出た18日朝、ご学友や侍従、警察、報道陣らと尾白川溪谷駐車場を出発。宿泊地の七丈小屋ではオーナー矢葺敬造さんや早野正美さん、宮下隆英さん、筆者が心待ちにしていた。

日の天狗岳の偵察もした。夕食は殿下と私のふたりでいただいた。殿下のご希望で、いつも登山者に出している食事と同じ物を、とのことだった。ハンバーグとご飯、我が家で作った無農薬の野菜サラダ、手作り味噌の汁などをお出しする。

その後、お休みして懇親会に移る。初めは殿下と私、息子、家内、私の姉の5人という顔ぶれだった。

午後の到着時刻が近付くと、ま
ず重いカメラを抱えるマスコミの
一団がやって来た。お盆や紅葉シ
ーズンを除いては静かな一帯が、
まるで銀座のような喧騒に包ま
れた。

やがて殿下が到着。整列して出
迎えた。甲斐駒に登るだけならほ
かの登路もあるが、開山以来の古
道をたどろうと、急勾配でスリル
満点の黒戸尾根を一気に約160
0m登ってきたわけだ。「体力・精
神力があり、山が本心からお好き
なんだ」と思った。

矢葺さんが歓迎の挨拶をして、
小屋と周囲の風景を説明。陛下は
ザックを背負ったまま聞き入り、
周りに視線を送られていた。



出発前に七丈小屋前で殿下と撮った記念写真。
左端が筆者

夕食は何を作ったか、はつきり
思い出せない。矢葺さんに電話で
確かめると「肉じゃが、アワビ、マ
グロの刺身などではなかったか」
との返事。夕食は梯子を上り2階
に運んだ。2階の一部のスペース
は畳の上に畳をもう一枚重ね、カ
ーテンを備え付けていた。

小屋の少し奥の旧第2小屋に泊
まるマスコミ関係者らの食事と就
寝準備もこなし、緊張感と責任感
を覚える、充実した一日だった。

矢葺さんはその夜、ヘリポートで
殿下と地酒を酌み交わし、山の話
で盛り上がったという。「陛下は
勧められれば笑顔で応じ、相手へ
の配慮と気配りがあつた」そうだ。
当時、約1ヶ月前から準備を始

め、小屋のト
イレ新設、登
山道整備、食
料の調達を体
験したり見聞
したりして、
皇族登山の舞
台裏を知った
気がした。「開
かれた皇室」
と言われるな
か、殿下ご自

身、窮屈に感じられているのでは、
と正直思いながら「いづれ国の顔
になられるお方だ」と思った。

19日も晴れた。ご来光を迎え、
朝食を準備している際、水場で殿
下とお会いした。「お早うござい
ます。いい天気で良かったです」
と挨拶すると、「お早うございま
す」と笑顔で返していただいた。
出発前には快く記念撮影にも応じ
てくださった。

一行を見送り、片付けをして後
を追いつけた。頂上の向こう側の
仙水小屋へ。到着した部屋ではク
ラシックが流れ、陛下と矢葺さん
が話をされていた。小屋の水は、横
を下る北沢の源流から地中深く掘
って引いていた。水運や水害など
水問題の研究者でもある殿下らし
く「この水はおいしい」と喜ばれ、
水筒に詰められていた。

陛下は常々、麓から甲斐駒を見
て憧れ、1987(昭和62)年8月
に登った日本第2の高峰、北岳か
ら見て登山を決意されたという。
陛下はその7月に日本山岳会の一
般会員になられ、北岳は会員とし
ての初登山だった。

甲斐駒に立つた感想について、
こう話されている。「登るにつれ

植生など山の表情が変わり、甲斐
駒は魅力ある山」。

今年2月に刊行された新潮文庫
『新天皇若き日の肖像』(根岸豊明
著)を見ても、陛下は白旗史朗さ
んとの対談で「私は甲斐駒ヶ岳が
好きなんです。形が勇壮な感じ
がしますね」と語られていて、嬉し
かった。

同書では「何故、山が好きなの
ですか」との問いに「登っている
最中は邪念がなく景色や植物に没
頭できる」と答えられている。陛下
が考える山の魅力とは、多くの登
山者も共感できる「無心になれる
こと」だと理解できた。

皇室の制度や祭祀に詳しい京
都産業大学名誉教授の所功さん
に仕事で会った同じ2月。「学生
時代、お会いしました」と体験談
を話すと、「帝王学を学んだ陛下
は日ごろ、心身を鍛えています」と
教えられ納得できた。

天皇陛下は日本の顔。甲斐駒の
ように凛とした姿に見えてくる。
山で無心になれる機会はもうない
かもしれないが、ときには雄大な
山の世界に想いを馳せていただき
たい、と願っている。

REPORT

第35回全国支部懇談会を奥日光で開催

栃木支部長 渡邊雄二

日光はA・サトウ父子ゆかりの地

2019(令和元)年5月25日から26日にかけて、栃木支部主催で全国支部懇談会を奥日光で開催した。お陰様で小林政志・日本山岳会会長、重廣恒夫・副会長、宮崎絢一・支部事業委員長をはじめ、全国の支部から総勢155名の参加者が集い、盛会の下に実施できた。

部のこれまでの開催に関してのご努力に敬意を表する必要があること、いつまでも断り続けることは他支部に対して失礼になることなどを考慮し、今回の開催を引き受けることにした。

開催に当たっては、本部の方針は「全国支部懇談会は支部の主催なので、担当支部の意向によつてその開催規模や内容などを決めることができる」との確認を得ていたので、全国から集まる会員が、これぞ日本山岳会にふさわしい全国集会だ、と感じていただける内容を企画した。

まず、開催場所を奥日光に設定した。理由は、日本山岳会の創始メンバーの1人であり、第6代会長の武田久吉がイギリスの外交官である父アーネスト・サトウとこの地を再三訪れ、日光の山々や自然に親しみ、植物学の研究に勤しんだ由緒ある地域であること。これを機に、会員には改めて110周年に及び日本山岳会の歴史を紐解いていただければありがたい、

しかしながら、本支部も10周年の節目を迎えたことにより組織力も少しは充実してきたこと、他支

と考えた。

次に宿舎の選定である。奥日光のリゾート・ホテルを貸し切り、大自然の中で日ごろの疲れを温泉で癒し、会員同士が懇談しながら夕食を楽しむ、懇談会としてふさわしいホテルとして、光徳の「日光アストリアホテル」に相談したところ、150名程度の人数で引き受けていただいた。1支部が主催する全国支部懇談会の適正規模はどの程度か検討していたところ、支部会員が相互に懇談をして親しみを持つて参加できる規模は150名程度と考えていたので、ちょうど良い定員であると決断した。

開会行事は「日光自然博物館」と相談し、レクチャー・ルームを利用させてもらうことにした。日ごろは小・中学生が奥日光の自然に関して学ぶ教室として利用している場所で、大人が150名も入ることがなく、椅子の数も不足しているとのことであったが、本懇談会の趣旨を理解してもらい、利用させていただくことができた。というのは、開会行事の記念講演では、前記したアーネスト・サトウと武田久吉父子に関する講演会を予定しており、博物館ではアー



各支部持参の銘酒も振る舞われて盛り上がった懇親会

ネスト・サトウと武田久吉父子に関する企画展を2018年に準備していた。また、2日目の見学コースに「英国・イタリア大使館別荘記念公園」などを予定していたからである。

記念講演の講師は、飯野達央氏にお願いした。飯野氏は本県職員として中禅寺湖周辺の外国別荘の復元や公園の整備に尽力され、アーネスト・サトウの研究者でもある。県職員退職後は、『天空の湖と近代遺産』(平成24年)、『日光学聖地日光へ アーネスト・サトウの旅』(平成28年)を出版し、現在は栃木県立博物館協議会会長の要職にある。

記念山行については、日本山岳会員の平均年齢が68歳という現実を直視し、登山コースとして「刈込湖・切込湖」のハイキングを計画した。奥日光の山々は標高2400〜2500mあり、標高差が1200mもあるのです。中高年齢者による集団での日帰り登山は厳しいのである。このコースは山頂を

目指すのではなく、新緑の静寂な森や湖、さわやかな空気、小鳥のさえずりなど、奥日光の自然を堪能していただく計画とした。湯元温泉の標高1550mから出発して1620m付近の2つの湖をたどり、1741mの山王峠を越えて光徳に戻る、のんびり歩いて4〜5時間のコースである。

もう一つのコースは、中禅寺湖周辺の史跡巡りをテーマとして、「英国・イタリア大使館別荘記念



芽吹き始めたミズナラ林を歩き、春を満喫した登山班

公園を訪れることにした。記念講演に関係した企画である。

ハイキングや史跡巡りを満喫

いよいよ本番。心配していた天気は2日間とも晴れの予報で、まずはおもてなしの第一課題はクリアでき、ひと安心した。

5月25日、開会行事会場の「日光自然博物館」には三々五々参加者が受付を済ませ、館内の見学や近くの華厳ノ滝の見学などで過ごしてもらった。13時からの開会式は、渡邊雄二・栃木支部長の挨拶に始まり、日光市長・大嶋一生氏、日光自然博物館・青木営業部長にご臨席いただき、歓迎の挨拶をいただいた。記念講演は、前記した飯野達央氏に「近代登山とアーネスト・サトウ父子の山旅」の演題で、スライドショーを交え90分お話し

ていただいた。日光開山と修験道、日光における国際的避暑地の誕生、アーネスト・サトウの日光訪問、アーネスト・サトウの山荘創建、別荘復元、武田久吉と日光の山々などについての分かりやすい話で、明日の

登山や見学に大変参考になった。講演終了後、約1時間の館内見学の時間をとり、宿舎の「日光アストリアホテル」に貸し切りバスで移動した。

ホテル到着後は温泉に浸かって疲れを癒し、18時30分からホテル内のレストランにて懇親会を開宴した。主催者を代表して栃木支部顧問の坂口三郎が挨拶、小林会長の来賓挨拶、重廣副会長の乾杯で祝宴が始まった。栃木の美味しい料理に舌鼓を打ちながら会員同士の会話も弾み、参加者支部紹介、次回、全国支部懇談会を主催する荒武八起・宮崎支部長の挨拶、最後に渡邊栃木支部長の万歳三唱で中締めとなった。引き続きの二次会は隣の和室に移動し、会員同士の懇親が続いた。明日に備え、22時にはすべての行事が終了となった。

5月26日、快晴の朝を迎えた。7時から朝食の後、お昼の弁当と「日光水物語」のペットボトルをそれぞれ受け取り、8時、登山コース1班がバスで「刈込湖・切込湖ハイキング」の出発点・湯元温泉に出発し、8時45分には2班が出発した。登山コースの混雑を避けるための時差出発である。登山コ

スに参加した方々は、途中の溜沼で昼食をとって予定どおりの時間で踏破し、14時から15時の間にホテルに無事帰着した。一方、中禅寺湖周辺の史跡巡り班は、9時30分にホテルをバスで出発、中禅寺湖畔の歌ヶ浜から昨日の講師である飯野氏の案内で「英国・イタリア大使館別荘記念公園」を見学し、正午に三々五々解散となった。

約2年余に及ぶ準備を経て、第35回全国支部懇談会を無事に終了することができた。これはひとえに全国からの参加者のご協力と、支部会員の渾身の努力の賜として感謝したい。地元日光の日本山岳会に対する理解と協力もありがたかった。本支部として、今回の支部懇談会の意義や目的を明確にして準備を進め、ほぼその成果を実現できたと思う。今回の懇談会に参加し、この機会に日光の山々を登山された方もいた。ぜひ今後、日本百名山の男体山や日光白根山など名峰がそびえ、戦場ヶ原や中禅寺湖の豊かな自然に抱かれ、世界遺産である東照宮に代表される文化遺産にも恵まれている、風光明媚な日光国立公園への再訪を祈念して、報告としたい。

REPORT

東海支部登山学校、第Ⅲ期開校へ

登山学校運営委員会委員長 榎 将美

東海支部の登山学校は3年目を迎え、第Ⅲ期が今年の7月8日から始業する。登山学校は、3年を1クールとしているが、そのⅡ期目が6月8日に無事修了式を終えた。このⅡ期2年間で事故もなく、スムーズに運営できたのは、一にも二にも指導員と事務局担当の不断の努力の賜以外の何ものでもないのである。

優先して受講していただく。

第Ⅲ期のカリキュラムは、これまでと同様、月1回の現地講習(山行)、2ヶ月に1回の机上学習を柱とする。第Ⅲ期のクラス編成は、初級教室は4クラスで、1クラスに担任(リーダー)1名、副担任(サブリーダー)2名、1クラス受講生7名である。指導員の合計12名、受講生28名の体制で臨む。中級教室は5クラスである。各クラス担任1名、副担任1名、補助要員5名を配した。受講生は1クラス6名、7名になる。補助要員は、クラス担任の要請に応じて、主に現地講習(山行)の指導に当たる。トータルで指導員15名、受講生35名である。

上級教室は1クラスとし、受講生10名、担任1名、副担任2名、補助要員を複数名配する。総計すると補助要員も入れて指導員約35名、受講生73名である。これを第Ⅱ期と比較するとクラス数、受講生数はほとんど変わらないが、指導員を増員したことにより指導員1名

に對し、受講生2名の割合となる。このことにより、より丁寧な指導を可能にした。

第Ⅲ期の開校に際して新しい試みが講じられた。それは特待生制度である。Ⅱ期を終えた段階で将来、支部のリーダーとなってもらえる意欲のある人を募集、特待生として第Ⅲ期を迎えていただくのである。今回5名の申し出を受けた。審査は書類審査と現地審査である。現地審査は名古屋近郊の猿投山で実施。全員が合格、ここに第Ⅰ期特待生5名が誕生した。言うまでもないが、特待生は第Ⅲ期の受講料が免除される。

この制度は、画期的だと言えよう。毎年5名の特待生が迎えられれば、3年で15名になる。うまくこの制度が定着すれば、指導員(山行リーダー)の新陳代謝と、支部運営の指導者育成が一挙に図られることになる。この制度は継続させ、絶対に実効を上げなくてはならない。

また、第Ⅲ期は1クールの最終年度なので、多くの受講生が卒業することになる。東海支部では、入校時の受講生全員を支部友扱いとしている。支部友の資格期間は3



滝根正幹ガイド(東海支部会員)によるロープワークの実習

年なので、自動的に支部友でなくなる。我々の希望としては、全員がJACに入会してもらって、支部員として支部活動に携わってもらいたいのである。果たして何名の方が支部に留まっていただけなのか、大いに期待しているところである。

東海支部は、間もなく創立60周年を迎える。さらなる支部の発展は、支部関係者の誰しもが願うところである。この登山学校の成果が、今後の支部の発展に大きく寄与することは自明であろう。支部の最重点事業として、今後も登山学校の運営に全力を傾注するところである。

さんけん通信

除雪で苦労した今年の山研開所作業

山研運営委員会担当理事

安井康夫

山研開所作業を4月20日(土)と21日(日)に行なった。新しく設置した受水槽に水道水を給水すべく、前日の午後に山研入りしたが、山研前は40cmほどの積雪。裏側に回り込むと、屋根からの落雪や吹きだまりでなんと1m50cmの積雪。大変だ！ とため息をつく。

バルブを掘り当てるためまずは除雪だ。管理人のご主人を含めて4名で除雪するが作業ははかどらず、除雪は翌日へ持ち越した。20日、到着した信濃支部山研委員2名に、駐車スペース確保のため山研前の除雪をお願いした。

昼過ぎに給水管近くのバルブを



残雪の下に埋もれている導水管を掘り起こす作業

掘り当てたが、途中の水抜き栓がいくら掘っても見付からない。このままだと給水できない。一か八か、河童橋横の山研用給水本管のバルブを開栓しに行く。しかし、これも硬い氷に覆われて、マンホールを見付けるのに苦労する。やっとのことでバルブを開栓して、山研へ水を送る。相変わらず水抜き栓は見付からない。そのうちに、給水管近くのバルブ口から水が吹き出てきた。助かった。水抜き栓は閉所時に締めていたのだ。

これで受水槽に水道水を貯めることができる。午後には到着した残りの委員で、山研の雪囲い板の取り外し組と、ミニ水力発電設置組に分かれて作業に入った。21日、建物関係の作業は終えたものの、ミニ水力発電関係は取水管の一部が凍っていたため、別の日に改めて作業を行なうこととなった。

ミニ水力発電小委員会
委員

杉村博(神奈川県工科大学)

山研運営委員会は、神奈川県工科大学と共同でミニ水力発電の実用化研究を行なっており、4月下旬から10月下旬まで、発電設備の動作実験を実施している。今年も山研の開所とともに、ミニ水力発電設備の動作準備作業を実施した。

作業は(1)導水管を残雪から掘り起こし、(2)冬季の凍結対策で水抜きのために分断された導水管を取り付け、(3)貯水槽と導水管を接続し、(4)上流水源である善六沢に取水フィルタを取り付け、(5)山研併設の水力発電小屋の電気系統や発電状況監視システムを動作させ、(6)水を流しながら全体確認と流量・発電状況の確認をする。

今年4月の降雪で残雪が多く、林道などは凍っている所があった。当日は上流へ10名弱で向かい、60cm強の残雪下に埋もれている導水管を掘り起こす。その後実際に取水し、貯水槽への導水を確認してみたところ、取水管のたわみが原因と見られる取水管内部の凍結らしき詰まりによって、満足な水量を得られなかった。そのため作業はここでいったん終了して、後日に委ねざるを得なかった。取水

管のたわみは、長期にわたる運用の中で、取水地の沢の形状変化があり発生してきたもので、これは同時に取水地への取水管の尺不足問題にもなっている。

5月18日(土)、作業を再開した。取水管延長と発電開始作業である。取水管延長はひと回り大きな管を5mほど取り付けて、パイパスした。幸いなことに、パイパスの購入手配をしていただいた信濃支部の方が、事前に5mの長さに切断加工してくださり、当日も2名が応援に来てくれたこともあって、非常にスムーズに行なうことができた。道中はすでに雪はないものの、5mのパイパス管を6本持つての山登りは大変な苦労で、木や草に引っ掛かりながらもなんとか上流まで担ぎ上げた。取り付けが終了し、水を流した。

取水地点の移動効果は抜群で、6本中1本が少し不調なものの、残りの5本で十分な水量が取水できており、当日の運転開始時点で最大1kw強の発電電力となった。例年では運転開始時800w強程度の発電電力なので、これが目に見える形で改善され、非常に喜ばしい結果となった。

REPORT

子どもたちが多摩川河口から雲取山に挑戦

NPO法人国際自然大学校 小澤潤平

最近の新聞で、「外遊び」を小学生の7割がしておらず、それは地方も都市部も同じ実態であるという記事を見た。私もキャンプの説明会を開催するときに、保護者の方に「子どもに外で遊びなさい、と言っても、実際は公園で集まってゲームをしているのが現状だ。現代は、外で遊ぶ機会が、親が子どもに提供する必要がある」と話している。そんな話をすると、実際にキャンプの参加につながっていく。保護者も、子どもが子どもらしくのびのびと活動する「場」と、「時間」と「仲間」を求めているのだと、改めて感じさせられる。

植村冒険館「自然塾」とは

そんな状況の下、自然の中で活動する機会を定期的に提供しているのが、東京都板橋区にある植村冒険館が主催する「自然塾」という事業。この「自然塾」は、自然の中でダイナミックに活動し、参加者が自分たちの力で課題を乗り越えていく、そんなパワフルな事業で

ある。

植村冒険館では、どのような状況に置かれても、人間らしい豊かな心で目標に向かって努力する、植村直己の冒険精神「ウエムラ・スピリット」を、永く後世に伝えるため、植村直己の冒険を伝える展示や自然を体験する事業を行なっている。その一つとして、小学4年生から高校生を対象に実施している自然体験事業が「自然塾」である。様々な自然のフィールドで、内容を変えながら年間12回程度プログラムを実施している。

今後の「自然塾」では、7月に「日本一に挑戦！富士山登山」。8月には、4泊5日全テント泊・自炊で過ごす「伊豆大島まるごとキャンプ」。9月から12月には、同じ参加者、同じキャンプ・スタッフで、様々なアウトドア技術を学ぶ全4回の継続プログラム「ステップアップ・アドベンチャー」などを予定している。

ここでは、GWの5日間（4月27日から5月1日）で実施された「海

抜0mから東京都最高峰を目指せ！〜東京湾から雲取山の頂へ〜」について紹介する。

マウンテンバイクから登山へ

4泊5日の行程で実施をした。海抜ゼロに限りなく近い多摩川の河口「六郷土手」から、マウンテンバイクと登山で東京都最高峰である「雲取山」を目指す5日間。テント泊・自炊をしながら、自分たちで計画を立てて踏破に挑んだ。参加者は15名の中・高生（11名が自然塾リピーター、4名が初参加）で3チーム編成、キャンプ・スタッフが9名、植村冒険館の職員が1名という陣容で臨んだ。

下表のようなタイム・スケジュールを組んだが、総距離100km以上、標高差約2000mの移動という、タフなキャンプであった。2019年のGWは、最大10日間という休日があることから、4泊5日という長い行程でのキャンプを企画した。道中様々なドラマがあり、キャンプ期間中の半分以上を雨に降られるという、もともと体力的に負荷の高い事業に対して環境的にも厳しいキャンプとなった。しかしながら、参加者はのび

●タイムスケジュール

	午前	午後	夕
1日目	池袋集合・電車移動	マウンテンバイク移動 六郷土手～府中／35km	自炊、作戦会議
2日目	マウンテンバイク移動 府中～	マウンテンバイク移動 府中～奥多摩駅／45km	自炊、作戦会議
3日目	登山 お祭～三条の湯／10km	テント設営	自炊、作戦会議
4日目	登山 三条の湯～三条ダルミ付近	登山 三条ダルミ～三条の湯	自炊、作戦会議
5日目	撤収、下山 三条の湯～お祭／10km	振り返り・電車移動・ 池袋解散	—

のびと、楽しみながら活動に取り組んでくれた。

1日目は、慣れないマウンテンバイクにまたがり、多摩川沿いのサイクリング・ロードを、地図を見ながらチームで走った。道に迷うチームもあったが、河口付近か



マウンテンバイクで多摩川沿いを快走する

ら府中までの35kmという道のりを、全チームが無事に目的地まで移動することができた。

2日目は、標高をぐんぐんと上げながら、府中から奥多摩までの45kmをマウンテンバイクで走った。途中からはサイクリング・ロードがなくなり、車道を走ることになつたため、より集中力を必要とする行程となつたが、安全のための声掛けやお互いのペースを気遣う姿から、チームとしての意識の高まりを見ることができた。

3日目は登山準備を行ない、三条の湯に向け出発。個人装備に加え団体装備を60ℓのザックにパンパンに詰め込み、参加者全員で運

んだ。疲労が出てきていたが、前向きな姿勢で、山小屋のテントサイトまで10kmの道のりを4時間ほどかけて移動した。

4日目の山頂に向けての登山では、山頂直下で雨風が強まり下山を余儀なくされた。全員がその暴風雨を体感し、話し合いを経て、納得してテントサイトまで引き返す決断をした。難しい判断ではあつたが、その場にいた者にしか分からない、達成感と満足感を参加者は感じていたように思う。山小屋に戻つてからの温泉は、参加者にとって苦労したからこそ、至福の時間となつた。

5日目はすべての備品を撤収し下山した。最後は、3チームだった参加者が自然と全員一緒になつて下山することになり、この5日間の絆の強まりを感じさせられた。下山後に行なつた5日間の「振り返り」では、チャレンジに対する充実感が表現されていた。

参加者が書いた「振り返りシート」の中にも、それらを象徴するコメントが書かれていた。一部抜粋して紹介する。

*自分が思う自分のすごいところ
(中学生・女子)

「やる前では、達成することすら難しいと思つていた。ただ、自分がやりたかつた達成したかつたことが、やる気だけでできたのは今までになかつたからとても嬉しかつた。親に言われたからやるというわけではなく、自分からやりたいと言つたからだろう。」

*仲間がいれば、大体のことは乗り越えられる(高校生・女子)

「仲間を大切に。一緒に何かをしてくれる人がいることは、すごいことだと思つた。自分一人だけでは考えもつかないことや、あきらめてしまうようなことも、仲間と一緒にならできると思つた。高校に入学したばかりで、よく分からない人がたくさんいるけれど、同じ目標に向かつていく仲間だから、助け合つていきたいと思つた。」

伝えたいウエムラ・スピリット

参加者にとつて、「一生に一度あるかないかのチャレンジ」となつた。「海から山まで100km以上を、2000m近くまで上がつたんだ」そんな経験をした人は、おそらく多くはいないだろう。この経験は、「やればできる」という自

信や、「仲間がいると大きな力になる」というコラボレーションの力を知る、良いきっかけとなつたことだろう。厳しい環境をも楽しみながら、課題を乗り越えていく参加者たちの前向きな姿勢に、「ウエムラ・スピリット(どのような環境においても人間らしい豊かな心で最善の努力をする姿勢)」が体現されていると感じた。

子どもにとつて、自然の中で活動する経験が少なくなつている今だからこそ、「ウエムラ・スピリット」を伝えていくプログラムを、これからも継続していきたい。

(NPO法人国際自然大学校 本校マネージャー)



雲取山山頂直下で撤退を決めたが、子どもたちは満足げな顔

INFORMATION

信仰の道「浅間山古道」が復活

安藤伸彌

浅間山は世界有数の活火山であり、その雄大な山容から富士山と見紛うほどの名峰として知られている。しかし、そこが古くから山岳信仰の対象とされ、多くの修験者(山伏)が登拝してきた霊山であることは、意外に知られていない。まして、そこに至る古道があったことなど、人々の記憶から忘れ去られてしまっている。本稿では、この古道復活に至るまでの道程を紹介したい。

現在、浅間山の登山口は天狗温泉浅間山荘と車坂峠の2ヶ所だが、昭和30年代初めまではバスが通れるような道はなく、ほとんどの登



山者が麓の集落から歩いて行った。小諸からの参詣道も、古くは江戸幕府の命で作成された「信濃国絵図」に記されており、大正時代に建立された「浅間登山元標」は、今でも街外れの神社に遺されている。そこで、古老の話や公図などを頼りに古道を推定。こもろ観光局にツアーを持ち掛け、調査を開始した。

実地踏査をしたところ、新しい舗装路に取って替わられたり、高校の敷地に分断された所もあったが、逆に国土地理院の地図から抹消された古道跡を発見したり、道中に設置されていた道標(丁石)を約20基見付けたり、信仰登山のなごりを伝える石仏・石碑がいくつも遺っていたりと、多くの収穫があった。

また、浅間山の信仰について調べると、浅間山の鬼伏せに虚空蔵菩薩が祀られたため、山麓には今でも40基以上の虚空蔵菩薩像が遺されていること、富士講や御嶽講よりも早く、室町期から一般庶民

向けに登拝が行なわれていたことなど、知られざる歴史を垣間見ることができた。

こうしてある程度目処が立ったところで、「浅間山古道トレイル」と銘打って、2018年の5月下旬に1泊2日でモニター・ツアーを実施した。参加費が無料ということもあって、受付開始から2日で満員となった。

参加者からは「普通に登山するだけでは絶対にならないポイントがたくさんあり、興味がある人にはたまらなかった」「修験者や昔の方の想いや苦勞を感じながら、タイム・スリップしたような感覚で楽しめた」といったコメントが寄せられ、ツアーは満足度の高いものとなった。

そして、1年の充電期間を経て、2019年6月初めに本ツアーを開催した。お陰様で今回も満員御礼となり、小諸駅から2日ばかりで前掛山に登頂。「普通では経験できないコースを歩けた」「自分で登っていたら知らずにいた見所が見られた」「全く知らない情報が聞けて、新鮮で良かった」といった評価をいただき、浅間山の新たな魅力を発掘するのに貢献できた



浅間山の知られざる歴史を学びながら歩いた参加者たち

と自負している。

現状では、まだ古道を知る人は少なく、整備が行き届いているわけではないため、こもろ観光局主催のツアーのみに留めている。しかし、今回の試みは、トレイルによって埋もれていた地域資源を掘り起こすことにつながっており、古道が日常的に復活する日もそう遠くないであろう。

幻とも言える信仰の歴史を探ることで見えてきた世界に、多くの人が誘われ、古くて新しいトレイルが歩かれるようになることを願っている。

(安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター)



中世古直子(なかせこ・なおこ)
会員番号6730

1937年 12月7日生まれ
1958年 名古屋山岳会に入会
1966年 名古屋山岳会ニュージール
ランド登山隊に参加、マウント・
クック日本人女性初登頂
1969年 日本山岳会に入会、東海支
部に所属
1970年 日本山岳会東海支部マカ
ル―学術登山隊に参加
1974年 日本マナスル女性登山隊に
参加、世界初の女性8000
m峰登頂者となる
2019年 4月18日、心筋梗塞にて逝去。
享年81

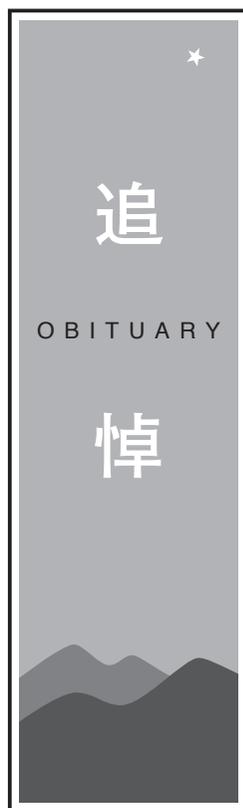
中世古直子さんを偲ぶ

遠藤京子

平成が終わる4月18日に中世古直子さんが心筋梗塞で亡くなった。その知らせは45年前、彼女と一緒にマナスルの頂に立った女性隊の内田昌子と森美枝子から受けた。「あの元気印の直ちゃんか、どうして」と信じられない思いで尾上昇・元日本山岳会会長(元東海支部長)に電話した。

山ではなく自宅のベッドの上で神に召されたということは、もう十分やりたいこといっぱいやったね。ご苦労さまでした、と思うべきか。いや、まだ81では早過ぎる。直ちゃんなら90超えても登っている姿がお似合いだよ。

名古屋の名門女子学園育ちの彼女が山登りを始めた動機は聞きもしたが、独りで登っていたらしい。『岳人』332号にある彼女の文によると、雪山への第一歩は11月の木曾駒へ、アイゼンなしのキヤラバン・シューズで踏み込む。幾度も転んだが、興奮と充実感を味わい、翌月、名古屋山岳会に



入会して本格的に登山経験を積み重ねていくことになった。当初は女子部に属していたが、4〜5年経ると女子の限界を知る。そんなとき、会の中にニュージールランドの登山計画が生まれた。男の中に女2人が参加してトレイニングに励み、自信を付けて2年後に初めての海外遠征が実現した。

標高こそ3000m前後と低い
が、氷雪をまとった、美しくも険しい南半球のアルプスを目指して1966年、神戸港を出港した。28歳、すでに結婚して一児の母となっていた。その成果はマウント・クックに日本人女性として初登頂、ほかに4座登頂した。

この遠征から帰国直後の3月に、長野県山岳協会主催の女子登山者講習会で彼女と私の初めての出会いがあった。女性の8000m峰登山実現への私の夢を語り、半年後に京都で女子登山者の集いを約束して一歩進んだ。私は2年後、思いがけず日本山岳会東海支部マカル―登山隊へのお誘いを受けた。地元の彼女も当然、「私も行きたい」と乗ってきた。1年間、集いや準備に京都から通っている間、幾度か彼女の家に泊めてもらった。

仕事と家庭と育児に多忙な生活を合理的な思考の下に手際よく進める術に感心した。私は肝臓が悪くなって参加を辞め、代りに愛知学院大山岳部OGの荻谷洋子を隊員に、と頼んだ。女性隊員2人は7000mまで体験した。

帰国後、「4ヶ月も留守にして息子に悪いママだった。一緒に白馬へ登るのでヘルプして」と荻谷が頼まれて同行した。子どもへの深い愛と登山への限らない情熱との葛藤を、ほとんど表に出さないう芯の強い人だが、やはり母である。目標だった女性の8000m峰へ。マナスルJACルートが韓国隊の雪崩大遭難と再挑戦のため使えず、未踏の東尾根に許可を得て、中世古偵察隊長ほか2名を派遣。取付から稜線下部を試登した。翌年の本隊は、韓国隊があきらめたのでJACルートにも許可を得て、中世古登攀隊長は隊員の意見をまとめながらもまず東尾根へ。上部に可能性がないと判断してJACルートへ転進。3名の隊員とシエルパ1名が登頂した。世界初の女性による8000m峰登頂という快挙を成し遂げ、私の夢を果たしてくれた。直ちゃん、ありがとう。

N
—
東 西 北
—
南 南 北
—
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

甲斐の山旅―徂徠・鳥水・抱影

小原茂延

儒学者・荻生徂徠が、甲府藩主となつた柳沢吉保の命を受けて甲斐国を見分し、『峡中紀行』（官遊の正式旅行記）と『風流使者記』（姉妹編で徂徠と同行の田中省吾との吟行記）を記したのは將軍綱吉の

時代、宝永3（1706）年という。藩公吉保の祖先・武川衆発祥の地である青木村にまで足を延ばし、菩提所である常光寺に詣で、さらに主君の旧莊柳沢村に至り、溪奥の餓鬼ノド（ゴルジュ状の場所か）の手前で引き返した、とある（北杜市ふるさと歴史資料などに拠る）。

それから時代を下ること約200年、明治36年7月に小島鳥水は同行者・山崎紫紅と甲斐を目指し、金峰山に登り、八ヶ岳を攀じ、甲

州台ヶ原の竹屋にわらじを脱ぐ。そこで昼餐を終えて偶感を記したというのが「山を讀する文」である。文末あたりに、「……徂徠先生その『風流使者記』中に曰く風流使者訪名山と。我らは風流使者にあらず、しかも天縁尽きずして、ここに名山を拝するの栄を得、名山が天を讀する如くにして、人間は名山を讀す、また可ならずや。」と述べている。

中村清太郎による鳥水・小島久太年譜『山岳』第44年第1号「鳥水記念号」によると、明治36年のころに、「7月、山崎紫紅と金峰山に登り、八ヶ岳に攀じ、続いて白峯北岳を極む」とあるが、北岳登頂はしていない。これは明治37年2月、雑誌『太陽』に「白峯紀行」を発表した関係から記したようであるが、この紀行文は後年、武田久吉が指摘したように、ウェストンが明治35年に登頂して発表した英文を翻訳

翻案したものと判明している。もっとも、この紀行文が志賀重昂や武田久吉、高野鷹蔵らに注目されて、山岳会創立に向けて大きな影響を与えたのは言を俟たない。

鳥水が『山岳』第3年第3号（明治41年）に発表の「白峰山脈の記」中の一篇で、「……天外に碧空を抜いて画然と白銀の玉座を高く据えている。そして農鳥山の鳥形の美わしいことを自分に説いてくれたのは友人N君である。彼は早稲田の文科出身で、創作に俊秀の才を抱きながら、今はしばらく峡中で書を講じる人となつている……」と紹介したのは、後に「星の文人」として活躍し、冥王星の和訳命名者である野尻抱影である。早大英文科を出て旧制甲府中学に在任中、数年にわたり小島鳥水に南アルプスの情報を逐一報告しており、自らも北岳に登頂して『山岳』に発表している。末弟が鞍馬天狗などで知られる大仏次郎である。その抱影からの報告の一文「一昨日朝初めて西山（注 南アルプスのこと）一帯に降雪あり……」などと、数年にわたり白峰の一陰一晴を知らされ、読まされる鳥水は、「往きたいなあ」と、拳に力を入れて、机

をトンと叩いた。」と述懐している。「我らは風流使者にあらず」といった鳥水だが、遺著となった『風流使者』の表題は鳥水自身が付けたという。文芸評論家、小島鳥水の

研究者として知られる近藤信行氏が『風流使者伝 小島鳥水』を書き、大佛次郎賞を受けたというのも何か徂徠・鳥水・抱影を結ぶ奇しき縁と言わねばではあるまいか。

活動報告

日本山岳会、同好会の各委員会、活動報告です。

山行委員会

カッコソウの咲く鳴神山

昨年、日本山岳会に入会したばかりだが、山の名前と花に興味を惹かれ、5月10日(金)、山行委員会主催の鳴神山山行に参加した。山行委員の車に12名が分乗し、桐生市北部、足尾山地南西端の駒形駐車場に着いたときには、すでに20台近くの自家用車とさらに1台のマイクロバスまで駐車して、人気の高さをうかがわせる。木々の梢に懸かるヤマフジのお出迎えを受けて歩きだす。新緑の中、涼しげな清流のせせらぎを耳

にしながらの歩きやすい登りで、ときどき巨岩が姿を見せ、その上にピンクのミツバツジが咲いている。足元にはスマレ、ヤマブキ、テンナンショウ、ヒトリシズカなども見られる。狛犬ならぬオオカミの阿吽あうんの像が左右にある雷神岳神社の鳥居をくぐってほどなく、双耳峰の一つの桐生岳(980m)山頂に到着。文字どおり360度の展望に大満足。すぐ隣の赤城山をはじめ、谷川岳、上州武尊山、尾瀬と日光の山々。霞が懸かっていた関東平野の奥にはスカイツリーも見えるところ。

おなごり惜しい山頂を後に、ヤ



桐田峠下でカッコソウ協議会会員の説明を受ける

マツツジとアカヤシオのトンネルを通つてもう一つの頂上の仁田岳を通り過ぎ、クヌギの林に祠がある桐田峠から東斜面の杉林を5分下つてカッコソウ(勝紅草)群生地へ。プリムラ属でサクラソウの一種で、世界でここにしか見られない濃いピンク色。この花の保存活動メンバーの説明を伺う。小さな苗は、開花まで最低でも4年を要すること、33年前から株を植えて、柵で保護している。少しずつでも増えていくことを祈る。

また、下りの最後で林道に出る直前には、ヒイラギソウの濃青色の群生地も見られた。関東平野の北の縁に位置するためか、雷を祭

図書受入報告(2019年5月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
荻田泰永	考える脚 : 北極冒険家が考える、リスクとカネと歩くこと	316p/19cm	KADOKAWA	2019	出版社寄贈
中村保	空撮ヒマラヤ越え 山座同定	234p/32cm	ナカニシヤ出版	2019	著者寄贈
ユウバリコザクラの会 (編)	夕張岳 大いなる自然 : その魅力を訪ねて	199p/21cm	ユウバリコザクラの会	2019	発行者寄贈
酒井国光	登り続けて60余年 : 酒井国光傘壽記念誌	264p/30cm	酒井国光・愛子(私家版)	2019	著者寄贈
上田茂春 (編)	「臺灣山岳 彙報」総覧 : 第1年第1号~第12年第11号	67p/29cm	上田茂春(私家版)	2019	著者寄贈
川井靖元	山からのメッセージ : 光と風と雪と	132p/25cm	日本写真企画	2018	著者寄贈
湯浅美仁	前穂高岳東壁遭難63年目の検証 : ナイロンザイル事件の光と影	257p/22cm	北白川書房	2019	著者寄贈
澤田大多郎 (編)	龍星閣 澤田伊四郎 造本一路《図録編》	130p/22cm	龍星閣	2019	発行者寄贈
相良嘉美	故郷、緑なれ : 佐賀発、香りで街おこし	164p/21cm	フレグランスジャーナル社	2014	著者寄贈
相良嘉美	香料商が語る東西香り秘話 (ヤマケイ新書 YS018)	229p/18cm	山と溪谷社	2015	著者寄贈
日本山岳会福井支部	福井県の山 (分県登山ガイド No.19)	134p/21cm	山と溪谷社	2019	著者寄贈
萩原浩司	写真で読む山の名著 ヤマケイ文庫50選 (ヤマケイ文庫)	270p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
萩原浩司・げんさん	萩原編集長の山塾 : 秒速! 山ごはん	128p/21cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
佐藤勇介 (監修)	ヤマケイ登山学校 / 登山入門	136p/26cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
北山真・杉野保	ヤマケイ登山学校 / フリークライミング	144p/26cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
北海道大学スキー部100年・山スキー部50年記念誌編集委員会 (編)	北海道大学スキー部100年・山スキー部50年 1912~2012記念誌	426p/30cm	北大山とスキーの会	2019	発行者寄贈
入澤達吉	伽羅山荘随筆	475p/19cm	改造社	1939	越智哲雄氏寄贈
藤森栄一	かもしかみち	273p/19cm	学生社	1967	越智哲雄氏寄贈
中西悟堂	鳥の山旅 (山溪山岳叢書 No.4)	124p/19cm	山と溪谷社	1946	越智哲雄氏寄贈
柳田國男	新國學談 第二冊 : 山宮考・おしら神・信濃櫻の話	237p/18cm	小山書店	1947	越智哲雄氏寄贈
田部重治	旅への憧がれ	277p/18cm	新潮社	1942	越智哲雄氏寄贈
竹節作太	我がヒマラヤの記	301p/19cm	博文館	1943	越智哲雄氏寄贈
逗子八郎	こころの山	281p/19cm	朋文堂	1938	越智哲雄氏寄贈
朝史門	山と漂泊	223p/19cm	朋文堂	1940	越智哲雄氏寄贈
春日俊吉	山と雪の受難者	297p/20cm	朋文堂	1939	越智哲雄氏寄贈



カッコソウ(右)とヒイラギソウ

神としてヤマトタケルノミコトほか2柱を合祀する祠を頂上に持つ鳴神山に、雷の心配のない快晴の日に登頂して関東平野を一望でき、カッコソウ保護活動の方々とも交流できて、大変有意義かつ楽しい山行だった。

登山口に戻ったとき、別の3人グループが桐生駅へのバスを2時間待つと言っているのを耳にして、車を出してくださったありがたみを痛感したのだった。山行委員会の皆様、ありがとうございます。

(松本博子)

生かされなかった 八甲田山の悲劇

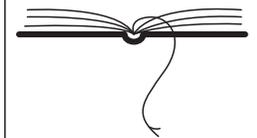
伊藤 薫 著



2019年3月
山と溪谷社
四六判240頁
1500円+税

著者は青森県生まれで元自衛官。青森第五普通科連隊などに勤務し、八甲田演習も経験している。前著『八甲田山 消された真実』（平成30年2月発行）では、雪中行軍の驚くべき事実を調べ上げた。手短かに言えば、この行軍に当たって目的地へのルートや防寒対策のノウハウなど、なんら情報収集せずに準備不足のなか、聯隊長のメンツが優先されて実行されたこと、猛吹雪となり隊員のみならず指揮を執るべき将校も正常な判断ができな

図書紹介



くなつて指揮命令系統が乱れたこと、そのため結果として多くの死者を出したこと、さらには大本営発表など、報告は事実を隠蔽し捏造されたものであった、ということである。

今著はサブタイトルに「生かされなかった」とある。これは、もともと雪中行軍は寒冷地でのロシアとの戦いを念頭に行軍や装備に備えるためのものであったが、そこで多くの死者を出す結果のなかで反省点や改善すべき点が多々あったであろうに、それが生かされていないとの意味である。

著者は雪中行軍を生き延びた将校たちが苦戦を強いられた原因がどこにあったか、旅順総攻撃の状況を丹念に検証していく。そこで浮かび上がるのが、情報収集不足と戦略の甘さである。相手の兵器などの戦力、要塞などの状況を調

令和元年度(前期)
「海外登山助成金登山計画」募集

海外登山助成金審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山助成金」による助成を行なっています。

第41回となる今回も、極限探究、新しい課題への挑戦、発想の新しさ、夢多き計画など創造的でユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員資格やパーティ編成などの条件は問いません。学生や若手クライマーも奮ってご応募ください。

記

- 対象 令和元年8月1日～令和2年1月31日に海外の山へ出発する登山隊。
- 申込み方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込み締切 令和元年6月30日(当日消印有効)。
- 審査と助成期間 令和元年7月初旬に審査、理事会で決定し助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出をお願いします。また、日本山岳会の会報「山」に掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局
電話03-3261-4433

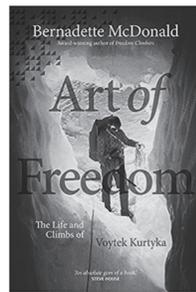
査し、情報収集することが大事である。
ところが、雪中行軍でだれも行ったことがなく、地図もないような目的地(敵を攻めるのに甘い考えで向かったように、旅順総攻撃も「敵を知る」ことのないまま、勝手な想定の下で戦略を立てるのである。いかに犠牲を少なくするかとの考えがどこにも見られない。弱点を突こうにも情報がなく、的確に突けないのだ。歩兵の死傷者が増えても、増兵して同じことを繰り返すばかりである。

戦争の状況を伝えるため生々しい描写も再三出てくるが、雪中行軍の場面と重なる思いがした。歩兵は勇敢に進むも、風雪の銃弾にバタバタと倒れたと同じように、敵の弾丸や手榴弾に次々と倒れるのである。

戦争には勝ったということになっている。しかし、これはロシア軍内部のクロパトキン、グリッペンベルク両大将の確執があり、死傷者が1万人以上ありながら途中で戦いをやめてしまった結果だった。これも指揮命令系統が取れず、

悪い方向に進んだ典型と言えよう。いずれにしても、ロシアとの戦いにおいて雪中行軍の教訓は生かされなかったのである。
(荒井正人)

Bernadette McDonald 著
Art of Freedom



2017年
Rocky Mountain Books
23×16cm 326頁
\$32.0

本書は、ヴォイテク・クルティカのバイオグラフィである。クルティカといえば、ポーランドの登山黄金時代を牽引してきた一人で、アルパイン・スタイル登山のパイオニアであり、登山経歴において繰り返し初登記録はあまりにも有名である。ただ、ピオレドール生涯功労賞の受賞を15年にわたって断り続けるような頑な自身の性格ゆえ、講演やインタビュースら数えるほどしか受けていないことから、登山界のレジエンドであるクルティカのバイオグラフィの出版は、待ちに待った驚きと歓喜と言えよう。

本書の筆者であるバーナデット・マクドナルドもまた、世界的に著名な賞を数々受賞した山岳書籍作家である。クルティカとのやりとりからクルティカを理解するのに7年掛け、クルティカのアルピニズムに対する複雑かつ謎めいた哲学、さらにはクルティカが人生で追求した「自由の美学」を奇想天外に、力強く、そして、詩的に表現している。
クルティカは、苛酷な環境に軽装備で望むアルパイン・スタイルにこだわり、ときには夜間登攀やビバークを選択し、パートナーと

ともに無事帰還する。クルティカとパートナーの技術力、体力、そして精神力には想像を絶するが、状況を正確に判断し、そして確実に危険を回避している。また、アルパイン・スタイルを貫くため、「シンプル」かつ「エレガント」なルートを探り、許可を取らない「違法登山」を好む。まさに論理的かつ統一的な理念に基づいた自由的発想の持ち主である。

クルティカの登山哲学のほかに、クルティカの両親や自身の生活を通してのドイツ占領下や共産圏時代のポーランドについては、日本人のほとんどがよく知らないであろうと考える。また、クルティカの生活を支えた遠征先との間の「密輸」がコミカルで面白い。さらに、山田昇氏や山野井夫妻らクルティカとパートナーを組んだときの、谷口けい氏の言葉の引用についてもとても興味深い。

(加藤真美)



**令和元年度第2回(5月度)理事会
議事録**

日時 令和元年5月15日(水)19時00分～20時50分
場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事

【欠席者】神長常務理事、齋藤理事

【審議事項】

1・令和元年度通常総会の開催について

令和元年度通常総会の開催あたり、各事項について以下のとおり審議した。

日時 令和元年6月22日(土) 午後

2時より

会場 主婦会館プラザエフ 〒1

02100085 東京都千

代田区六番町15番 TEL03-

326518111 (賛成12名、反対なしで承認)

決議事項
第1号議案 平成30年度事業報告(案)承認の件(賛成12名、反対なしで承認)

第2号議案 平成30年度決算報告(案)承認の件(賛成12名、反対なしで承認)

第3号議案 令和元・2年度役員(理事・監事)(案)選任の件(賛成12名、反対なしで承認)

報告事項
1・令和元年度事業計画および予算の件
2・その他。(賛成12名、反対なしで承認)

2・平成30年度事業報告(案)について
平成30年度事業報告(案)について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

3・平成30年度決算報告(案)について
平成30年度決算報告(案)について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

いて
平成30年度決算報告(案)について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

4・寄附受入の承認について

令和元年5月8日付の寄附1件(200万円)について寄附受入および管理規程第3条2に基づいて審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

5・令和元年度支部特別事業補助金について
支部事業委員会において審査された令和元年度支部特別事業補助金について審議し、8支部に対し総額67万円の助成を行なうこととした。(賛成12名、反対なしで承認)

6・新支部長の就任承認について
以下4支部の支部長の就任について審議した。
北海道支部 藤木俊三(No.14979)
千葉支部 松田宏也(No.11748)
関西支部 茂木完治(No.13568)
北九州支部 日向祥剛(No.11427)

(賛成12名、反対なしで承認)

【報告事項】

- 1・入会希望者13名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)
- 2・寄附金3件の受入について報告があった。(古川)
- 3・平成30年度の監査法人からの往査所見について報告があった。(古川)
- 4・記念事業委員会の活動状況について報告があった。(重廣)
- 5・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。(安井)

【今後の予定】

- 1・常務理事会・理事会
・令和元年度6月度常務理事会
6月4日(火) 18時30分～
- ・令和元年度6月度理事会
6月12日(水) 19時00分～
- 2・令和元年度通常総会
・令和元年6月22日(土) 14時00分
・東京都千代田区 主婦会館プラザエフ

ルーム日誌 5月

7日 常務理事会 スケッチクラブ

8日	記念事業委員会 山行委員会 三水会 休山会 山想倶楽部
9日	財務委員会 支部事業委員会 スケッチクラブ 九五会
10日	図書委員会 「山の日」事業委員会 山岳地理クラブ
13日	自然保護委員会 スキークラブ
14日	山岳研究所運営委員会 図書委員会 二火会 フォトクラブ
15日	理事会 スケッチクラブ つくも会
16日	科学委員会 みちのり山の会 マウンテンカルチャークラブ
17日	YOUTH CLUB 三水会
18日	山の自然科学研究会
20日	総務委員会 資料映像委員会 YOUTH CLUB
21日	フォトクラブ YOUTH CLUB スキークラブ
22日	会報編集委員会 家族登山普及委員会 麗山会 00会
23日	学生会部 公益法人運営委員

会 山遊会

24日	図書委員会 沢登り同好会 II
27日	青年部 総務委員会 山想倶楽部
28日	デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 二火会 平日クラブ
29日	スキークラブ
30日	YOUTH CLUB 5月来室者 464名

会員異動

物故

米田文郎 (4767)	19・1・7
寺本正史 (7416)	19・5・17
高野誠一 (7866)	19・4・16
平井吉夫 (8312)	19・5・24
布目治二 (8875)	18・10・28
長岡伸恭 (10761)	19・5・30
堀内孝雄 (11526)	19・3・1
鎌田耕治 (12015)	19・4・28
仁田研也 (15475)	18・8・14
許 基滄 (15784)	19・5・24
坂野雅之 (16238)	19・5・23

退会

加藤昌晴 (7204)	
土田紘介 (7449)	
下田泰義 (8523)	福岡

門脇愛子 (8605)	熊本
西村 正 (9043)	静岡
田村邦彦 (9121)	
加藤稜子 (10232)	熊本
中山秀樹 (10882)	東海
高田 潤 (10957)	
飯島正章 (11250)	
西野禎志 (11559)	
藤川昌寛 (11941)	広島
花島徳夫 (12152)	北海道
石垣武久 (12209)	山梨
平石弘子 (12707)	
真田幸俊 (12808)	埼玉
堀越仁治 (12893)	
足立義郎 (13104)	関西
池 昇一 (13234)	北海道
赤山伸夫 (13382)	関西
小林三三子 (13765)	
河野二六夫 (14526)	広島
高澤 靖 (14545)	
日高義文 (14976)	
小泉るり (14986)	
加藤信夫 (15077)	東京多摩
川名久子 (15200)	宮城
堀 保枝 (15276)	東海
伊與田忠昭 (15318)	東海
阿部美子 (15477)	北海道
廣島美由紀 (15798)	
河村まこと (16036)	茨城
小柴哲也 (16059)	

林久美子(16098) 東海
松原秀夫(16216) 岐阜
齋藤 修(16261) 関西

樋口大樹(16367) 東九州
中田良友(A0019) 熊本
横川好文(A0154) 広島

I N F
O R M
A T I O N

インフォメーション

◆北ア・西穂、焼岳、霞沢岳を巡る

山行委員会

北アルプス全山縦走シリーズ第8回は、上高地山研を利用して西穂、焼岳、霞沢岳を巡ります。北ア全山縦走には欠かせない山域です。夏の終わりの静かな上高地もお楽しみください。

日程 8月30日(金)前泊〜9月4日(水)予備日1日

集合 8月31日午前8時 新穂高

ロープウェイ駅前

行程 西穂山荘―西穂高岳―西穂山荘(泊)―焼岳―上高地・山研(泊)―徳本峠小屋(泊)―霞沢岳往復―明神―明神館(泊)―上高地

解散 9月4日(水)上高地

参加費 4万3000円(30日の)

前泊分は含まず)

募集人数 15名

申込み 7月20日までに清登緑郎へ

☎090-93325-8258

✉sanko@jac.or.jp

前泊希望の有無をお知らせください。

*詳細案内はホームページを参照してください。

◆「山の日マガジン2019」発行

「山の日」事業委員会

「山の日」啓発のツールとして、全国山の日協議会が昨年到现在、フリーペーパー『山の日マガジン2019』を発行しました。B5判サイズで40ページです。JACの全会員には6月号(本号)に同封して

お届けします。

◆ナンガマリII峰報告書頒布案内

日本山岳会関西支部東ネパール登山隊2016 ナンガマリII峰初登頂報告書「未知の頂へ NANGAMARI II」

頒布価格 1500円(送料込み)

購入希望者は、〒・住所・氏名・電話番号を明記して ✉tsuneo.shigehiro@asics.com もしくは078-85516667にFAX

されたうえ、代金を下記にお振込みください。

口座記号 0098003

口座番号 166138

加入者名 日本山岳会関西支部

第2口座



◆編集後記

●6月第1週は赤城山に行きましたが、気象庁の梅雨入り宣言どおり俄か雨に見舞われ登山はやむなく中止、東の間の晴れ間を縫って覚満淵を散歩しました。「このカエルの大合唱のような声は何?」「春なのに、もうヒグラシがこんなに鳴いているの?」「ミズナラの森を歩いていると、こんな質問が次々と投げ掛けられてきました。

●大合唱の正体はエゾハルゼミで、落葉広葉樹の森を好む、ヒグラシを小さくしたような蝉です。まばゆいばかりの新緑と、それに映えるレンゲツツジ、そして、うるさいほどのこの蝉の声を聴くと、「また山に春が巡ってきた」と、嬉しくなるのは私だけでしょか。

「蝦夷春蝉青く小さし声きそふ」(水原秋櫻子) (節田重節)

日本山岳会会報 山 889号

2019年(令和元年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社